

「身近な隣人」になっていたクマについて

久門 美月（ワイルドライフマネジメント事業部 福島事業所）

1. はじめに

令和7年の1年を象徴する漢字に「熊」が選ばれた。ポジティブな採択理由であればクマ好きとしては嬉しかったが、残念ながらクマの出没や被害が相次ぎ世間的に大きな社会問題となったため選定されたようだ。令和5年もクマの出没が相次ぎ、連日お茶の間を騒がせたり、新たに国の制度や法律が変わったりした様子に驚いたが、それを上回る事態に色々考えさせられる1年だった。

個人的な話だが、令和7年の1月から神戸から山形に引っ越しして再び東北の住人になった。それによって、クマ問題は単なる興味深い話題ではなく、自分ごとの問題として認識せざるを得なくなった。今年の秋は山形市の公式LINEから連日クマの出没情報が発信されて、お散歩を断念した日がしばしばあった。

身近な隣人となったクマはいつからこんなに「身近」になってしまっていたのか。具体的にいえば令和5年と令和7年の未曾有のクマ大量出没に至るまでにどのような変化が起きてきたのか。少し時間を

さかのぼって、クマの大量出没、市街地出没について話をまとめてみたいと思う。

なお、本稿では主にツキノワグマの出没を中心に扱ったため、ツキノワグマについて「クマ」と表記している。

2. クマの大量出没の歴史

クマの大量出没の傾向を見ていくために、今回は環境省が取りまとめている許可捕獲数（都道府県知事もしくは環境大臣の許可を得て実施された有害捕獲数）を集計した^{*1※2}（図1）。クマの許可捕獲数には狩猟による捕獲が含まれていないことに留意が必要である。「クマの大量出没」の定義は捕獲数だけで表されるものではないかと思うが、長期的かつ全国的に収集できる情報として今回は許可捕獲数の推移を大量出没の歴史として見てみることにする。

（1）平成のクマ大量出没

平成10年～平成15年まで捕獲数は700頭～1700頭程度で推移していて、年による変動が確認されていた。平成16年に初めて2000頭以上の捕獲が発生

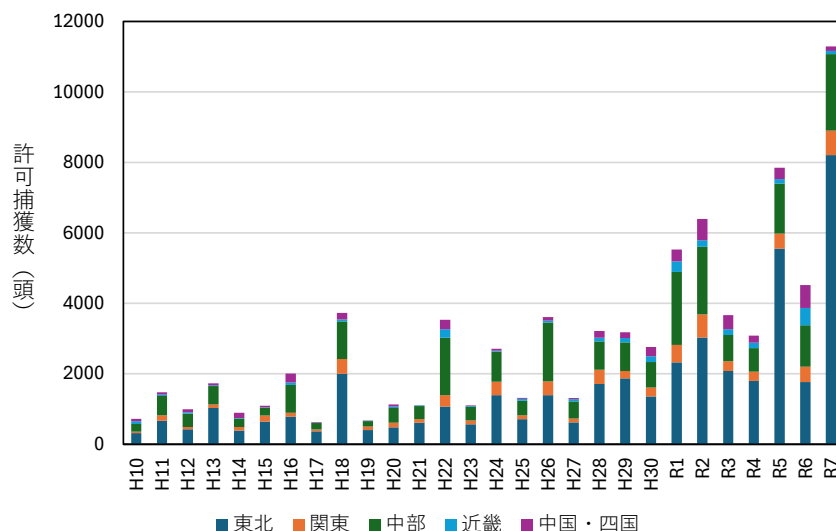


図1 許可捕獲数の推移（平成10年～令和7年（11月時点））

し、これが初めての「クマ大量出沒年」となった。この年は中部地方（特に北陸地方）での出沒が多く発生していて、地域限定的な出沒であるものの、平成のクマ大量出沒の先駆けとなった年であった。平成 17 年には一時的に捕獲数が大幅に減少したが、平成 18 年の捕獲数は 3,732 頭となって、平成 16 年を大きく上回る事態になった。この年は東北地方から中国・四国地方まで広い範囲で通常より捕獲数が増加する事態となり、全国的なクマ大量出沒であった。平成 19 年から平成 21 年までは再び 2,000 頭未満となる年が続いたが、平成 22 年から平成 26 年にかけては 2 年に一度の頻度で大量出沒が発生した。また平成 28 年から平成 30 年については捕獲数の値は高止まりした。平成の大量出沒が始まった頃から、平成の終わりにかけて徐々にクマの出沒の度合いは高まっていた様子が見受けられる。

関係者の間またはクマ出沒の周辺住人にとっては平成のクマ大量出沒については大きな問題になっていた。日本クマネットワークでは平成 22 年に発生した大量出沒を受けて「日本のクマを考える 繰り返されるクマの出沒・私たちは何を学んできたのか？ — 2010 年の出沒と対策の現状 —」というシンポジウムを開催し、森林総合研究所では平成 18 年～平成 22 年の間に大量出沒の予測に関する研究が行われていた。ただ令和 5 年や今年のクマ出沒と比較すると、まだ出沒の程度や社会の問題意識は低い時代だったと思う。

（2）令和のクマ大量出沒

令和元年の捕獲数は 5,529 頭、令和 2 年の捕獲数は 6,395 頭で、それまでの捕獲数よりも増加した。令和 3 年、令和 4 年は 3,000 頭程度に一時落ち着いたが、令和 5 年の捕獲数は 7,854 頭となり、未曾有のクマ大量出沒年となった。その 2 年後である令和 7 年は 11 月時点で、過去最大の 11,290 頭となった。この値は平成 10 年の捕獲数（725 頭）の約 15.5 倍である。

（3）地域別の推移

図 1 では、クマの生息が確認されている 5 つの地方に分けて図化している。分け方については表 1 に記載した。

表 1 地方区分

東北地方	青森県、岩手県、宮城県 秋田県、山形県、福島県
関東地方	茨城県、栃木県、群馬県 埼玉県、千葉県、東京都 神奈川県
中部地方	新潟県、富山県、石川県 福井県、山梨県、長野県 岐阜県、静岡県、愛知県
近畿地方	三重県、滋賀県、京都府 大阪府、兵庫県、奈良県 和歌山県
中国・四国地方	鳥取県、島根県、岡山県 広島県、山口県、徳島県

各地域の捕獲数の推移を折れ線グラフで図化したものを図 2 に示す。全体を通して捕獲数が多いのは、東北地方、次いで中部地方、近畿地方、関東地方、中国地方となっている。平成 16 年は先に述べたように中部地方での捕獲数が増加した年であった。平成 18 年、平成 22 年、平成 24 年については程度の差はあるが、複数の地域で連動して捕獲数が増加した様子が見られる。一方平成 28 年、平成 29 年については東北地方だけ増加した。令和元年や令和 2 年は中部地方の捕獲数の増加率が高い。また、令和 5 年や令和 7 年の未曾有の大量出沒で大きく捕獲数が増加したのはほとんど東北地方であった。

3. 市街地出沒について

市街地での捕獲数や出沒数といった数値が全国画一的に収集されたデータを見つけることができなかったため、私が今までみたシンポジウムやニュースで得た情報ベースに市街地出沒の流れを簡単に記載する。（そのため情報の収集に偏りが発生し、不足している情報が数多くあることをあらかじめご了承ください。）

私が初めてクマの市街地出沒について課題として認識したのは平成 27 年（2017 年）に札幌で行われた日本クマネットワークのシンポジウム「記念講演／20 年のあゆみ・市街地に侵入するクマ」だ^{*3}。シンポジウム内では札幌市で平成 23 年～25 年にヒ

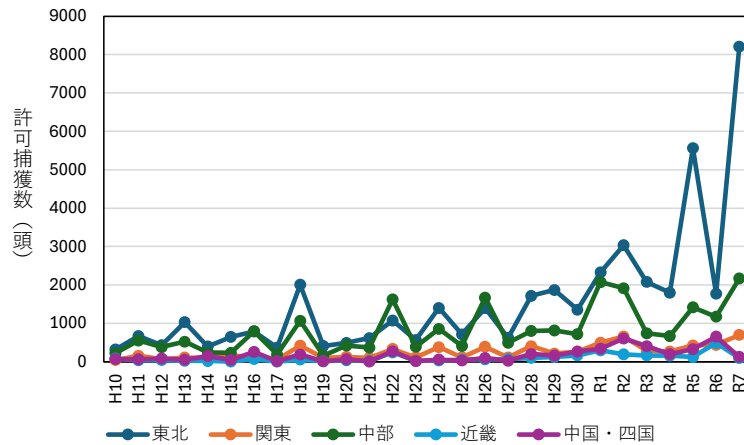


図2 地域別の許可捕獲数の推移（平成10年～令和7年（11月時点））

グマが出没した話や長野県内で平成22年、平成24年に市街地に出没した話題が提供された。つまり三度目の大量出没年である平成22年辺りから散発的に市街地出没が発生していたようだ。当時すでに市街地出没の要因としてクマの生息域の拡大や侵入経路として河川が利用されている可能性が示唆されていた。

令和に年号を変えると単なる出没にとどまらず生活被害や人身被害につながるような市街地出没が発生するようになっていった。令和2年に石川県で発生したクマがスーパーマーケットに侵入した事件^{※4}はクマが人のエリアに近づきすぎていることを象徴するようなニュースだった。また、令和4年には岩手県の盛岡駅周辺でのクマの目撃が相次いで発生した^{※5}。令和5年の未曾有のクマ大量出没の年には、人身被害も数多く発生していて、人身事故が山中や農地ではなく市街地周辺でも多数発生したことが報

告されている（図3）。

市街地出没は平成のクマ大量出没の時代から散発的に発生し、その出没件数や地域が年々増加・拡大していった。市街地出没は単なる出没に留まらず、人身被害の増加を招いてしまったと考えられる。

4. 人身事故発生の年次変化

環境省が取りまとめている平成20年から令和7年（11月時点）のクマによる人身被害発生人数について図4にまとめた^{※7}。残念ながら初期のクマ大量出没年の平成16年、平成18年の情報は含まれていないのだが、その後の平成22年、平成26年の大量出没年には人身事故件数が増加したことが示されている。ただ平成24年の大量出没年は前後の年と同程度の発生件数だった。

令和元年、令和2年の大量出没の時には150人を超える人身事故が発生して、当時過去最大となって

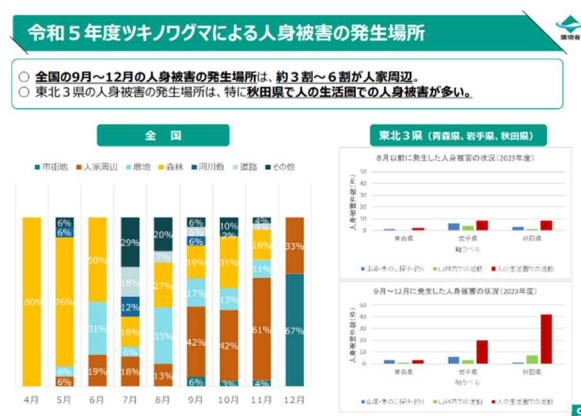


図3 令和5年度人身被害の発生場所^{※6}

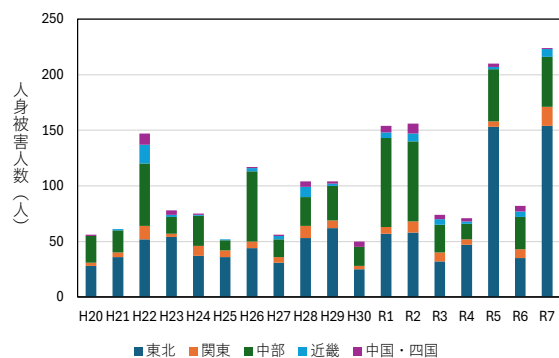


図4 人身被害人数の推移（平成20年～令和7年（11月時点））

いた。令和5年と令和7年の人身被害人数はさらに突出していて、それぞれ210件と224件だった。

また、クマによる人身被害の死亡数について図5にまとめた。死亡数は許可捕獲数や人身被害人数と相関が強いわけではなく、0人～2人の年が多い。平成28年の4件は秋田県の鹿角で起きた被害で当時全国的に大きく報道された。令和に入っても死亡数の大きな増減はみられなかったが、令和7年は11月時点で11人と過去最悪の事態になっている。

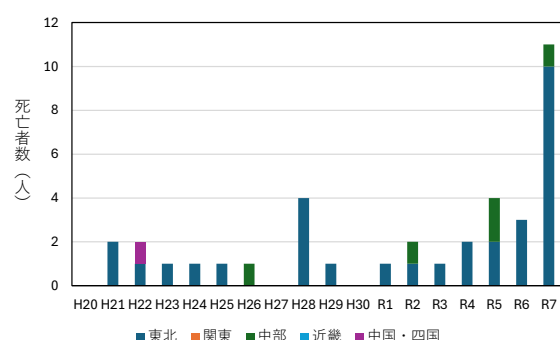


図5 クマによる死亡者数の推移
(平成20年～令和7年(11月時点))

人身事故や死亡事故は多くは東北地方で発生しており、次いで中部地方で発生している。クマによる大量出沒は数多くの課題があるが、特に東北地方や中部地方ではクマの人身被害をなくすことが最も重要な目標の一つになると考えられる。クマによる人身被害の一般的な発生状況は、今まで山中や農作業中に単独で活動していてクマと偶発的に出会ってしまった際に起きるといわれていた。しかし、令和5年や令和7年の人身被害は市街地周辺で発生したり、複数人で活動していた際に襲われる場合も報告されており、人身被害発生の原因解明はこれからの課題である^{※8}。

5. まとめ

私が今回データを改めて振り返って思ったのは、令和5年、令和7年の未曾有のクマ大量出沒は突然発生したのではなく、徐々に段階を踏んでここまでの大きな出来事になったということだ。また、これらのトレンドを地域ごとにまとめてみたことで、全

国で全く同じようなトレンド、程度で発生はしておらず、地域ごとの特性があるということも改めて感じた。

冒頭で疑問にあげた「クマはいつからこんなに身近になっていたのか」という疑問の答えは、平成の中期頃から徐々にというのが一つの答えなのではないかと思った。

6. 最後に

ここまで駄文にお付き合いいただきありがとうございます。色々な場所で語られていたことの繰り返しのような内容になってしまったかと思いますが、個人的には令和5年と令和7年のクマ大量出沒は何だったのか改めて振り返れた機会になりました。これから東北地方に住む一員として、自分も動けることは何か考えて行動していければと思います。

今回はクマ側の変化にフォーカスしてまとめてみましたが、クマに対する社会（ヒト側）も大きく変化していきいていると感じます。もし何とか情報をまとめることができれば再びFieldNoteに投稿したいと思います。

参考文献

- ※1 鳥獣関係統計（平成10年～平成19年）．環境省．<https://www.env.go.jp/nature/choju/docs/docs2.html>（参照2026-1-16）
- ※2 クマ類の捕獲数（許可捕獲数）について [速報値]．環境省．<https://www.env.go.jp/nature/choju/effort/effort12/capture-qe.pdf>（参照2026-1-16）
- ※3 記念講演／20年のあゆみ・市街地に侵入するクマ．日本クマネットワーク．<https://www.japanbear.org/wp/wp-content/uploads/2017/11/522ad7ad5b71db035775197c481229dc.pdf>（参照2026-1-16）
- ※4 【石川】手が届く距離にクマ 加賀・商業施設に侵入．中日新聞．2020-10-20．<https://www.chunichi.co.jp/article/140055>（参照2026-1-16）
- ※5 【警戒続く】クマの目撃相次ぐ「クマが移動している」岩手・盛岡市．日テレNEWS．2022-8-

12. <https://www.youtube.com/watch?v=qbiHsUNdt6U&t=25s> (参照 2026-1-16)

※6 クマ類による被害防止に向けた対策方針（令和6年2月8日）クマ類の生息状況、被害状況等について（参考資料1）. 環境省. <https://www.env.go.jp/nature/choju/effort/effort12/kuma-situation.pdf> (参照 2026-1-16)

※7 クマ類による人身被害について [速報]. 環境省. <https://www.env.go.jp/nature/choju/effort/effort12/injury-qe.pdf> (参照 2026-1-16)

※8 日本クマネットワーク. 2025 年秋季のクマ類を巡る状況に関する現状整理. <https://www.japanbear.org/wp/wp-content/uploads/2025/11/JBN-genjyoseiri2025.pdf>

新人紹介

今年1月より関東支社へ配属となりました、松木一幸（まつき かずあき）と申します。

まず、全くの他業界から今回ご縁を頂けた事、感謝いたします。

出身は北海道 帯広市です。転勤の多い家庭だったため、北海道での居住期間は大学時代の4年間が主ですが、小中高の長期休暇中は北海道で過ごしており、“地元は？”と聞かれれば北海道と答えております。しかし住民票上は生誕～大学へ入学するまでの18年間、道民ではないと言う事になっており、原理主義派の親族には“内地の人間だろ”と指摘され続ける人生でした。

北海道の大豪農に憧れ農業高校へ進学したものの新規就農のハードルは高く、大学進学へ進路を方向転換、東京農業大学（北海道キャンパス）へ進学いたしました。

大学では、主に水圏の生物について学び、1年次から海棲哺乳類に関する研究をしていた研究室を出入りしていた事もあり、同研究室で鰐脚類とそれらへ寄生するハイダニ科を研究対象としておりました。

フィールド調査やラボ作業だけ参加していたものも含めると、海棲哺乳類を対象としたセンサス・消化管寄生虫の寄生状況調査・生殖器（精巣）を用いた性成熟の状況調査、陸上動物ではエゾユキウサギの糞中 DNA に関する調査など幅広く手を出して

いました。

元々、生き物への強い興味があり大学でもそれらについて学んでおりましたが、大学卒業後は無人潜水艇（ROV）のパイロットや海底ケーブルの接続技術者として働いたり、環境コンサルティング会社で海底資源探査や深海生物探査をしたりなど、本当に全く関係のない業界に身を置いておりました。

日常的に何か月もの期間、洋上や海外の僻地へ出張していた事もあってか、帰国日の電車内で SNS や動画配信サービスを利用している若者を見る度、“スマホの通信規格を 2G にすれば出張が減るのでは？！”などと突飛な考えをする事も多々ありましたが、様々な国や地域の人々の役に立っているというやり甲斐を感じながら日々勤めておりました。

そんな洋上へのお出張中、WMO の職員募集情報を知り、“やはり自分は生き物に関わる仕事がしたい”と強く認識し周囲数百キロ何もない洋上から応募致しました。

未経験の業界ですので、業務を進めるうえでの手技や作法をご指導していただきつつ、これまでの経験も活かしたら最良と考えております。

皆様から頼りにされる存在となる事を目指し精進いたしますので、ご指導ご鞭撻をいただけますと幸甚に存じます。